『証拠がある』（ヨハネの福音書 5 章 30-47 節）2021.8.22.

＜はじめに＞ エビデンス(evidence)が各所に問われる昨今です。信頼に足るかどうかを探るために根拠を求めることは当然です。しかし、エビデンスを選り好みしたり、無視することも現実には起きています。イエスは、人が論理的に考えて受け入れる特性を尊重されています。

Ⅰ　イエスは何者か

①いのちを与える(17-29)

イエスが安息日に病人を癒し、床を取り上げたことの是非を問うユダヤ人に、イエスはご自分が父なる神から遣わされた神の御子であると語られます。御父と御子は一つとなって、いのちを与え祝福し、死せる者にも永遠のいのちを与えるために今も働いておられます。

②イエス自身の証言(30-31)　※(23,24,30,36,37,38,43)

イエスとは何者か？―この質問は福音書に一貫し、読者にもその理解を問い掛けます。イエスは父から遣わされたと繰り返し述べます※。遣わされた者は派遣主の意向に基づいて行動します。受け入れる者にはいのちを与え、拒む者はなすがままにされます。

③ほかにも証言がある(31-32)

イエスは31節で真偽を確かめる律法(申命記 19:15)をあえて自身にも適用されています。人々が理解し納得するために、イエスは父から遣わされた御子である証拠を提示されます。彼らが受け入れ、救われるために何とかしようとするイエスの心が垣間見られます。

Ⅱ　イエスを証しするもの

①バプテスマのヨハネ(33-35)

彼はイエスに先立ち、主の道を整え(マタ 3:3)、救い主を指し示す声(ヨハ 1:23)として証しするために現れました(1:6-8,15,32-34)。人々は彼のもとに集まり、彼の教えを最初は歓迎しましたが、その厳格な要求の前にしたとき、彼から離れて行きました。

②イエスのみわざ(36)

イエスは数々の御業、奇跡を行われ、人々はそれを見て神をあがめました(マルコ 2:12)。病人を癒し、苦しむ人を救い、乏しい者を満たし、死人さえもよみがえらせました。これらの御業は、人を愛し、あわれまれ、そのいのちを祝福される父の御業を想起させます。

③御父のことば(37-39、46-47)

御父自ら「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ」(マタ 3:17)と証しされました。人々はその御声を聞いたことはありませんが、聖書から聞くことはできます。聖書は神のことばで、モーセら記者を通して与えられました。その聖書のテーマは御子キリストです。

Ⅲ　証拠と向き合う

①栄誉は誰から(41-44)

人はすべてを公正公平にさばかれる唯一の神の前に生き、この方を愛し、信頼するようにと神が造られました。しかしそこから目を逸らすと、自ずから周囲の目を意識して生きるようになります。それ故、父の名によって来たイエスを拒み、周りの誰かに依存するのです。

②証拠があるのに信じない(38,40,45-47)

イエスはユダヤ人たちの中にある強い不信を見抜いておられます。頑なに信じない人は自分が間違っていないと確信しているからです。その根拠はユダヤ人として生まれ、律法を守っているからです。しかし、彼らが望みを置く律法が彼らを罪に定めます(詩 14:3)。

③わたしのもとに来なさい(39-40)

否定的な表現はイエスの切なる願いの裏返しです。証拠を客観的に精査したなら、イエスを神の御子キリストと信じ受け入れるはずです。頑なに信じて来たものを捨てるのは、死に匹敵する屈辱です。しかし、そうする者を神は永遠のいのちを与えると約束されます。

＜おわりに＞「神は実にそのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ 3:16)。愛は相手への尊敬と信頼に表れ、そのことばと心を受け取ります。神への愛はあなたにありますか(H.M.)